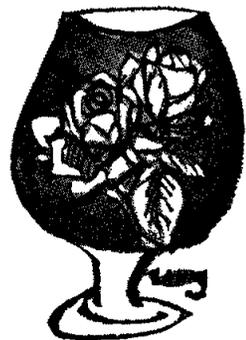


ウトナイ湖の水辺の鳥

——冬の調査結果——

藤 卷 裕 蔵



冬にオオハクチョウがウトナイ湖に渡来することは、古くからよく知られている。

また、一九六一年以来、苫小牧市白鳥保存委員会が中心となってオオハクチョウの観察をつづけ、毎日の詳しい記録を「白鳥調査報告書・苫小牧の白鳥、第一集」（一九六四）同じく「第二集」（一九六六）として発表している。

ウトナイ湖には、オオハクチョウ以外にもガン、カモ、アイサなどの水辺の鳥が渡来する。しかし、いままでの報告には、オオハクチョウ以外の水鳥についてあまりふれられていなかった。私は、日本鳥類保護連盟の依頼（四十二年度鳥獣保護事業基本調査）をうけ、一九六七年十一月～一九六八年三月の間五回、ウトナイ湖でオオハク

チョウをはじめ、他の水鳥類の観察を行った。ここにその結果を報告する。

観察は、毎回一～二時間ユースホステルと美々川川口との間の湖岸から、二〇倍望遠鏡で湖全体をみわたして行なった。

ウトナイ湖では、十一月下旬～十二月月上旬に薄氷がはり、十二月中旬から完全に結氷し、美々川川口と勇取川入口付近に水面がみられるだけとなる。春は、三月中旬から氷がとけはじめて水面が広がり、三月下旬～四月上旬に氷は消える。水鳥は、氷がないときには、日中大部分が湖岸近くのヨシ原にはいついて、一部分が湖上で採食している。結氷期間中は、美々川川口と勇取川入口近くの開水面で採食しているか、

またはそのまわりの氷上で休んでいる。

五回の観察で、表①に示すように一七種の鳥類を記録したが、これらのうちおもなものについて述べる。なお、カラスやトビのように水鳥ではないが、湖上で観察されたものも表に加えておいた。

・オオハクチョウ・

オオハクチョウの数は、十一月下旬には三〇前後であったが、十二月下旬には五〇近くになった。その後一～二月は観察できなかつたが、三月中旬には約一五〇と増加し、下旬には約五〇となった。

いままでの記録（前述の白鳥調査報告書、第一集、第二集、以下同様）によると、初

渡来日は十一月下旬～中旬である。はじめのうち数は少なく二〇以下で、しばしば姿のみられなくなるときがある。その後は一月にはいつてから数は増加しはじめ、二月下旬～三月中旬にそのシーズンの最高数となる。そして三月下旬～四月中旬に数は急激に減少する。

今回観察した数をいままでの記録と比較すると、渡来ははじめのころから多く、三月には十一～十二月より増えてはいるが、いままでよりはるかに少ない。

幼鳥の割合は、十一月に四九%であったものが、翌年三月には一六%と減少している。十一月と三月とは同じ群がこの観察場所にいたわけではないので、減少の原因については明らかではないが、第一に考え

表① ウトナイ湖の水辺の鳥の観察結果

観察日時	1967			1968	
	11月22日 12.45 14.30	11月29日 13.00 15.00	12月25日 12.25 14.00	3月15日 12.15 13.05	3月30日 12.10 13.00
種名					
ハシブト	3	2	4	2	4
ハクセキ					2
セグロ		1			
ノスリ		1			
トビ					3
オジロ		1			1
オオハク	26	35	49	159	89
オオヒシ					56
マヨシ	25		40	52	71
ヨシガ	1		2		16
ヒシ	33	13	8	40	102
ヒシ	6	2	12	5	4
オキ	7	2	1		
ホオ			14	14	19
ミ	4		8		1
カ	5	53	2	1	15
カ	360±	880±	650±	630±	320±
カ	1				

注：表中±は大体の数を示す。

・他のガンカモ類・

オオハクチョウ以外のガンカモ類は、表に示すように九種みられた。

ガン類ではヒシクイ一種のみで 三月下旬に勇払川入口付近のヨシ原にみられた。

ヒシクイは、オオハクチョウのようにウトナイ湖では越冬せず、渡りの途中によるだけである。しかし、秋には観察できなかった。

カモ類は、少ないときでも約四〇〇、多いときには一、〇〇〇個体がいる。これらのカモは結氷期には氷上で休んでいるものが多い、このような場合には種類を識別できなかつたので、表には「カモ類」としてまとめた。

カモ類の中では、マガモとヒドリガモがもっとも多い。ついで多いのはオナガガモとホオジロガモである。キンクロハジロやヨシガモは少なく、単独、または二〜三個体のグループがたまにみられるだけであった。カワアイサは多くないが、ときには同種のみ大きな群で湖上を飛んでいることがあった。

・カイツブリ・

られるのは、冬期間の死亡率が成鳥より幼鳥で高いためであろうということである。オオハクチョウは、通常五〜六卵生むといわれている。もしこれが全部孵化するとすれば、成鳥一つがいに幼鳥五〜六個体となるから、孵化時の幼鳥の割合は約七五％ということになる。このことから、生まれながらに南に渡って冬をすごし、ふたたび繁

殖地にもどるまでの死亡率は非常に高いということが推測できる。

結氷すると、オオハクチョウは開水面のある美々川川口と勇払川入口近くで採食しているが、前者では比較的数量が少ない。そして氷がなくなると、湖の東岸一帯に広がって採食するようになる。

この鳥は、従来北海道では夏鳥とされている。今回は十一月に美々川の川口で一個体観察されただけである。多分南下が遅れたものであろう。

・ワシタカ類・

ここではトビ、ノスリがしばしばみられるが、ここに生息する水鳥類とはなんの関係もないようである。

オジロワシは、五回の観察のうち二度みられたが、いずれの場合にもオオハクチョウやカモの群からはなれて氷上においていて、水鳥をおそうようなことはなかつた。

以上、ウトナイ湖の冬の水鳥類について簡単に述べたが、冬期間ここに生息する水鳥類の数は、湖の面積が広いわりには少ないようである。

この報告を書くにあたり、観察の際、いろいろとお世話いただいた苦小牧ユースホステルの伊賀岩太郎氏にお礼申しあげる。

(北海道立林業試験場)